様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６２２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１５５２７

研究課題名（和文）強制入院下における依存症治療の長期予後調査

研究課題名（英文）The long-term prognostic rerearch of patients with addictive disorder in compulsory hospitalizataion

研究代表者
常岡　俊昭（TSUNEOKA, TOSHIAKI）

昭和大学・医学部・講師

研究者番号：３０４４５６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：非自発的入院下で依存症(アルコール・薬物・ギャンブル)治療の効果を調べるため2019年4月～2021年3月に依存症で当院から退院した患者と同時期に当院依存症外来を初診したもののうち59名を対象として同意取得時と一年後と二年後に郵送もしくは対面で調査を行った。
　治療を自身で希望したもの（任意群）と、非自発的に行われた者（非自発的群）の退院後の外来継続率、自助グループ参加率、再入院率に有意差は認めなかった。退院後一年間の再使用率のみ任意群で47%,非自発的入院群で86%と有意差を認めたが、二年後調査で直近一年間の再使用率は任意群43%,非自発的入院群30%で有意差は認めなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
非自発的介入群は退院直後一年間の再使用率は高いものの医療・自助グループに繋がり続けることで二年後には自発的に入院治療を希望したものと同等の治療効果を得ることができる可能性が示唆された。依存症治療は「他の精神疾患が落ち着いてから専門病院」「本人が治療の意思を持つのを待つ」だけでなく、「他の精神疾患で入院中にも積極的に介入する事」「本人が治療の意思が明らかではなくても介入する事」など早期介入する事が有効である可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：In order to investigate the effects of addiction (alcohol, drug, gambling) treatment under involuntary hospitalization, 59 patients who first visited our addiction outpatient department at the same time as patients who were discharged from our hospital due to addiction in April 2019 ~ March 2021 were surveyed by mail or face-to-face at the time of obtaining consent, one year later, and two years later.
　There was no significant difference in outpatient continuation rate, self-help group participation rate, or readmission rate after discharge between those who requested treatment voluntarily (voluntary group) and those who received it involuntarily (involuntary group). The re-use rate of reuse in the first year after discharge was 47% in the voluntary group and 86% in the involuntary hospitalization group, but the re-use rate in the last year was not significant in the voluntary group and 30% in the involuntary hospitalization group.

研究分野：依存症

キーワード：依存症　非自発的入院　自助グループ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年アディクションの概念は広がっており、対象はアルコール・違法薬物のみでなく、市販薬・処方薬にも広がり、物質でなく行動に対する依存であるギャンブルやインターネットゲーム、買い物、万引きなどもアディクション治療の対象となってきている。またアディクション治療は過去には「底つき体験」に代表される本人が治療の意欲を持つまでは治療の対象ではない、としてきたが近年は早期発見・早期治療が叫ばれ、結果としてアルコールだけでも約 100 万人が治療対象者と言われている。そのため今までにあったアディクション専門病院だけで全てを診ることは非現実的となっている。また多くのアディクション患者がうつ病や不安障害・統合失調症など内因性疾患を合併することも指摘されており、一般精神科でのアディクション治療プログラムの作成は喫緊の課題と言える。

今回の調査では強制入院下で入院プログラムを開始した者（以下強制入院群）、自身の希望での入院下で入院プログラムを開始した者（任意入院群）、自身で希望してアディクション外来にきた者（外来群）の 3 群の予後を比較することで強制入院下における入院プログラムの効果について検証することを目的とする。依存症の治療は自身が治療を希望する動機づけが重要であり強制的に行う事に意味は少ないと言われている一方で実際には自殺企図で強制的に入院した際に自助グループに出会って断酒を続けるなど、強制入院下での出会いが本人の治療に大きく貢献する例は特異的なものではない。海外ではドラッグコートなど強制的な治療介入中に動機づけがなされ効果を上げている事例も散見される。また我々は後方視的研究で当院に依存症で入院したもののうち、退院後当院での通院加療を希望したものの治療継続率を調べ両群に差がない事を報告した。しかし退院後、他院での治療を希望したものを含めた治療継続率については調査を行えていない。

２．研究の目的

非自発的入院下で依存症(アルコール・薬物・ギャンブル)治療を行われた者が退院後どのような転機をたどるかを調査し、自発的に入院治療を希望したもの、自発的に外来治療を希望したものとの比較する事で、非自発的入院下における依存症治療の有効性を検証する。また対象者の特性を調べる事で非自発的入院下での治療が特に効果を来す、もしくは、効果を来さない群があるかを確認する。

３．研究の方法

対象者は 2019 年 4 月～2021 年 3 月までに当院依存症外来を初診、もしくは同時期に当院を退院した患者のうち文章による同意が取れたもので 20 歳以上 75 歳以下のもので強制入院群、任意入院群は退院時に、外来群は初回外来時に本人より文章・口頭にて同意を取れたものを対象とした。3 群共に同意取得から１か月以内に以下を聴取する。なお全てアディクション治療における一般治療の中で行われる質問紙・聴取であり多くは診療録にすでに記載されているため、本人の許可を得て研究者が転記し、抜けている部分のみ研究者が本人に確認した。

確認項目：属性、生活状況、薬物使用歴、治療歴、JART（Japanese Adult Reading Test）,GSES（General Selh-efficacy Scale）、AQ-J（Autism Spectrum Quoient 日本語版）CAARS（コナーズ成人 ADHD 評価尺度）問題飲酒の程度（WHO/AUDIT:The Alcohol Use Disorders Identificadtion Test）

対象物質が薬物であるものには下記を加えた。
薬物問題の重症度（DAST-20：Drug Abuse Screening Test‐20）

対象がギャンブルであるものには下記を加えた。
ギャンブル依存症自己診断テスト（ＳＯＧＳ：サウス・ギャンブリング・スクリーン）

同意から 1 年後から一か月以内と 2 年後から一か月以内に当院通院中の患者に関しては外来にて、当院通院外の患者には電話もしくは郵送にて下記を聴取した。なお期間内に診療録にて記載されている者に関しては本人の許可を取って転記した。
生活状況、GSES（General Selh-efficacy Scale）、問題飲酒の程度（WHO/AUDIT:The Alcohol Use Disorders Identificadtion Test）、外来継続率、自助グループ継続率、治療プログラムへの参加率、アディクションからの離脱（クリーン）期間

なおアディクション・併存する内因性疾患の治療方法について本研究で介入する事はなく、各主治医・本人の判断によって通常通りに行わた。

【結果】当院に自身で入院を希望して退院となった依存症患者 27 名（任意入院群）と非自発的入院となり退院した患者 16 名（非自発的入院群）と、外来治療を希望して来院した 16 名（外来治療群）の計 59 名から同意を得た。一年後調査の回収率は 71%で、外来治療群が 69%、任意入院群が 63%、非自発的入院群が 88%であった。また回答者による現在の医療機関に通院しているものは外来治療群が 81%、任意入院群が 85%、強制入院群が 88%で、現在の自助グループへの通所は外来治療群が 69%、任意入院群が 70%、強制入院群が 69%と群間で差は認めなかった。

退院後の一年間での精神科への入院に関しては任意入院群で 26%が、強制入院群で 19%が再入院を、外来治療群では 1 名が入院を経験していた。

治療を自身で希望したもの（任意群）と、非自発的に行われた者（非自発的群）の退院後一年後、二年後の外来継続率、自助グループ参加率、再入院率に有意差は認めなかった。退院後一年間の再使用率のみ任意群で 47%,非自発的入院群で 86%と有意差を認めたが、二年後調査で直近一年間の再使用率は任意群 43%,非自発的入院群 30%で有意差は認めなかった。

また JART,CARRS の点数と外来継続率、自助グループ参加率、再入院率それぞれとは関係を認めなかった。またＡＱは全例でカットオフ値を下回った。

４．研究成果

非自発的介入群は退院直後一年間の再使用率は高いものの医療・自助グループに繋がり続けることで二年後には自発的に入院治療を希望したものと同等の治療効果を得ることができる可能性が示唆された。依存症治療は「他の精神疾患が落ち着いてから専門病院」「本人が治療の意思を持つのを待つ」だけでなく、「他の精神疾患で入院中にも積極的に介入する事」「本人が治療の意思が明らかではなくても介入する事」など早期介入する事が有効である可能性が示唆された。

一方で本研究の限界点として研究中にコロナ禍となり一時的に自助グループが閉鎖、病院のグループも中断されたこと、多くの患者がコロナ対策として病院への受診に抵抗を感じる期間があったことや生活様式の変化が挙げられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 常岡俊昭
２．発表標題 強制入院下での依存症治療の有効性
３．学会等名 第41回日本社会精神医学会学術大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関